

MRI 検査におけるガドリニウム造影剤投与に関する説明書

今回、あなた様が受ける MRI 検査では、造影剤という検査薬を使用します。以下の説明をお読みにになり、ご不明な点は「かかりつけ医または当院放射線科医師」へご相談ください。当日、造影剤の使用に納得されましたら「MRI 検査におけるガドリニウム造影剤投与に関する同意書」へご署名いただきます。

1. 造影剤とは何ですか？

診断にあたって情報量を増やすため、画像にコントラストをつける検査薬です。通常、静脈内に投与します。MRI 検査では、キレート化されたガドリニウム造影剤が使われます。キレート化されているため毒性は著しく低減され、速やかに腎臓から排泄されます。腎機能が正常であれば、注射後6時間で80%以上が腎臓から尿として排泄され、やがて全てが体外に排泄されます。

2. 造影剤を使う利点はなんですか？

静脈内に注入された造影剤は、血管を介して全身の臓器に分布します。したがって、血管腔の状態、臓器および病変部の血流状態が把握でき、画像診断上重要な情報となることがあります。

3. どのような患者様にも造影検査はできるのでしょうか？

アレルギー体質の方は、副作用を生じる可能性が約3.8倍、喘息の方は、1.5倍高いとされています。また、造影剤で具合が悪くなったことがある方は、高い頻度で副作用を生じる可能性があります。重い腎臓の病気のある方も腎臓からの排泄が遅くなる可能性があります。次に該当する方は、あらかじめ「かかりつけ医または当院放射線科医師」にお知らせください。

- 3-1. 以前、薬物や造影剤で具合が悪くなったことがある。
- 3-2. 本人または血縁者に喘息やアレルギーの方がいる。
- 3-3. 重い腎臓の病気がある。

4. 造影剤にはどのような危険性があるのでしょうか？

最近では、副作用の少ないものが開発されていますが、それでもまったく危険性をなくすことはできません。軽微な副作用を含めて1~2%の患者様に何らかの副作用が生じます。造影剤の副作用には、検査中や直後に生じる即時性(4-1)のものと、検査終了数時間から数日後に生じる遅発性(4-2)のものとがあります。その他、ごくまれに造影剤が血管外に漏れる(4-3)ことがあります。

- 4-1. ほとんどは気分が悪くなったり、吐いたり、じんま疹が出たり、顔がほてったりといった軽く一過性のものです。しかし、まれに冷や汗がでたり、胸が苦しくなったりすることがあります。また、4万人に1人程度の割合で、ショックなどの重篤な副作用を生じることがあります。きわめて稀ですが、死に至る報告もあります。
- 4-2. まれに、検査終了数時間から10日後ぐらいの間に体がだるくなったり、頭痛がしたり、じんま疹等ができることがあります。
- 4-3. 細心の注意を払い造影剤の注入を実施していますが、造影剤を急速注入した際、血管外に漏れることがあります。漏れると注入部位が腫れ痛みを伴う場合があります。通常は時間の経過とともに自然に吸収されますが、漏れた量によっては切開等の処置が必要になることもあります。

5. 緊急時の対応について教えてください。

5-1. 即時性副作用

検査中は、医師と看護師が常にあなたをみています。予期せぬ事態については、当院医師が最善の対応をいたします。

5-2. 遅発性副作用

検査終了数時間から数日後、先に述べたような症状や他に何か異常が現れた場合は、すぐに「かかりつけ医または当院放射線科医師」までご連絡ください。その際、いつどのような検査で造影剤を注射したか忘れずにお話してください。

お問い合わせ

東京都大田区大森南4-13-21 東京労災病院 放射線科
直通電話 03(3742)7532

